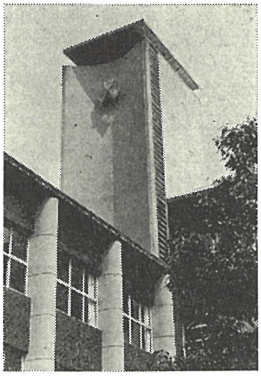

大江直吉氏（元就職部長 元本部庶務部長）に聞く

戦後の同志社

聞き手　河野仁昭

終戦間もない頃

――大江先生が同志社へ就職されたのは、戦後ですね。

大江　昭和二十三年三月でした。それから四十六年まで、二十三年間お世話になりました。終戦直後のある日同志社の構内を通ったらT先生から「学生の世話をする人が欲しい」といわれて、私は同郷の岡本清一さん（元法学部教授）を推薦した。ところが、岡本さんが間もなく辞めたいと言われたものだから、まアしばらくならというぐらいな気持で、同志社に参ったような次第です。

――最初は学生部のお仕事でしたねえ。

大江　現在でいえば学生部ですが、その頃は泰山捨蔵さんという方がおられて、学事課と学生部を一諸にしたような仕事をやっておられました。事務所は致遠館の、いまの監査室で、大原正次君や森田泰世君が泰山さんの下で手伝っていました。

――先生のお仕事は、学生主事ですか。

大江　そういうものでした。学生主事といっても、戦前、戦時中の学生主事というのは、学生の風紀上の取締りとか思想的な問題の指導とかでしたが、戦後はそれが変ってきたのです。

――生島吉造先生や水内数之助さんが、戦時中はやっていたんですね。

大江　二人とも、わたしの大学時代の同級生で（昭和六年、大学卒業）、学生の監督指導をやっていた。全国の学校どこでもその時代は同じようにやっていたのでしょう。

わたしが就職して間もなく、S・P・Sすなわちスチューデント・パーソネル・サーヴィスという指導理念がアメリカから入ってきました。これは複数の学生、あるいは学生集団に対して、よりよい学生生活を送らせ、無事に卒業して立派な社会人になれるように、物心両面の援助、つまりサーヴィスをする、という考え方で、それまでの日本の学校には全くない新らしい理念でした。

文部省なども、これからはS・P・Sでやらなくちゃいかんということで、国立大学などを会場にして研修会をやり、同志社からも私も含めて山本文雄、日並幹男、駒井四郎君らに出席してもらって、その新しいやり方を勉強してもらったりしたものでした。とにかく、時代が大きく変わり、学生部の仕事のや

り方や性格が変ってきたわけですよ。

――学生の生活も大変だったんでしょう。

大江　そうです。みな貧しかった。学校も戦中戦後の物のない、学生数も少ない時代で荒れ果てていた。軍隊から復員してくる学生などがぽつぽつ入ってくる。軍隊のカーキ色の服を着て、軍靴はいてね。学校へ入っても、みな、生活に困っているので、勉強どころじゃなかった。それでわたし達は学費の延納、分納の手続きをさせたり、アルバイトの世話をしてやったり、悩み事を聞いてやったりしました。とにかく、みな飢餓の一歩手前みたいな状態だったですよ、あの頃は。

わたしが就職して一年後に、吉田茂内閣の文部大臣に、民間人で哲学者だった天野貞祐先生が就任され、天野さんの働きで国の奨学金ができた、いまの育英会です。同志社の学生でその恩恵に浴するものは、その当時はごく僅かではあったけれども、それまでは国の奨学金など全くなかったんだから、当時としては有難かったですよ。

大江直吉氏

学生の就職問題

――当時は、学生の就職斡旋も学生部で？

大江　生活援護ということでね。

――現在と比較して、どうでしたか。

大江　戦前には、大学卒業者というのは、帝国大学の卒業者が中心で、私立大学出身というのは、社会的にはあまり認められてはいなかった。同志社など私立の中ではよい方やったでしょうけれども、お隣の京大に比べたらあまり問題にされていなかったわけです。ところが、岩倉にあった高等商業学校の方にはよい会社から求人があった。京都では、大学卒は京大、専門学校卒は同志社高商というのが一般という風潮でした。

わたしが学生の世話をするようになって間なしに、卒業生を送り出す時期になってきて、就職のことを考えてやらなきゃいかなくなってきた。ところが、求人があまりこんわけですよ。京大はどうやろかと思うて行ってみたところが、そりゃもう全然ちがう、大手の企業その他の有名会社からずらっときているわけです。それでわたしは、求人会社の名前と所在地を写して帰って、大阪の大会社を中心に一社ずつ訪問して、「採用するしないは別にして、同志社の卒業生にも、就職試験のチャンスだけは与えて欲しい、そしていいのがいたら雇ってやって頂きたい」と頼んで廻ったわけです。すると、会社によっては「よかろう」と言って、試験を受けさせてくれるところが出来るし、採用してくれる会社もあるようになってきました。

そんなことをしていたら、西堀美智子さんという方が学生部に来て下さることになったので、彼女に頼んで京大の求人会社を写しに行ってもろうたりしましたよ。とにかく、同志社へは当時、あまりよい求人がこなかったのは事実でした。

――谷利進さんも、早くから就職の仕事をしておられましたね。

大江　谷利君は、高商（当時は経済専門学校）の事務室で、就職の世話をしていた。商学部となって学校が今出川へ移ってきたん

で、谷利君にも学生部へ来てもらって、それまでの就職の仕事などの経験を生かして一緒にやってもらったわけです。彼は商家の出で、学生を就職させることがなかなか上手で、熱心でした。

熾烈だった学生運動

——学生部といえば学生運動という連想がはたらくのですが、当時はどうだったんですか。

大江　さっき言ったように、終戦当時というのは、みな食うに困っていたから、学生運動どころやなかったですよ。時代がすこし落ち着いてからですね、身を入れて勉強する者がでてきたり、学生運動をやる者などがでてくるのは。

——そうすると、二十五、二十六年ころですか。

大江　そうですね。たしか、二十六年の秋でしたが、「天皇陛下」が京都大学へ来られることになった。あれなど、そりゃものすごい騒ぎでしたよ、学生の一部が反対運動をやって。当時の日本の警察は、まだ弱かったし、機動隊のようなものもなかったから…。

——朝鮮戦争の頃ですねえ。

大江　朝鮮戦争で隣の国の状況がわるい。日本国内でも、そのために不安がつのり、イデオロギーの点でもマッカーサーの命令で日本が支配されていたから…。折角民主主義の平和な世の中になったのにという気持が、若い学生諸君にはあったのと、それと、みんなまだまだ貧しかったから、日頃のそういう不満のはけ口を、学生運動の方向へと求めて行っていたと思う。

府警本部長の自宅へ火焔瓶を投げ込んだり、交番を襲うたり、そりゃひどかった。

昭和二十七年には、そんなことで破壊活動防止法が敷かれた。それに反対して、学生運動がまた盛り上がるという具合でした。京都でも、立命館が広小路学舎へわだつみ像を建てて、その除幕式に京大生が行こうとして無届けデモをやって、荒神橋の上で警官隊と衝突して橋のらんかんがこわれ、鴨川へ学生が落ちた。七、八人の重軽傷者が出るという騒動があった。例の「荒神橋事件」ですね。実際のところ、学生部の仕事をしておっても、怖かったですよ。殺気だっていたから。

——先生は当時、学生部の？

大江　学生課長でした。いま思うと、実に大変な時代だった。そう思います。

事務機構改革と当時の同志社

——昭和二十九年から三十一年頃にかけて、事務の機構改革がおこなわれますねえ。

大江　部課係制が敷かれ、現在のような機構の元が出来たのは、三十一年頃でした。

——先生も機構改革にタッチされたんですか。

大江　あれは千田民衛さんが中心になってやられたので、わたしは直接にはタッチしていません。ただし、学生部のことをどうするかといった相談にはあずかりましたけれども……。千田さんのブレーンのような方は、何人かおられました。

当時の学生部長は斉藤亥三雄先生でしたし、学長は大下角一先生でした。

——機構改革が実施されて、先生はただちに総務部長に就任されたんですか。

大江　わたしが初代ではなくて、その前に泰山さんがやられました。泰山さんが定年で退職されたんで、それで学生部から移ったのです。

大下角一氏

総務部には機構改革で、人事、経理、調度、庶務などの課が設けられましたが、若くて適当な人がいないからというので、人事、調度、庶務などの課長は、総務部長が一時期は兼務でした。

――ほとんど全部やないんですか。(笑)

大江 まあ、そうだけれども、財政規模も人員も、まだまだこじんまりしていたのでね。

――その頃は、同志社の財政はどうだったんですか。

大江 戦後の私立大学は、まだまだよくはなっていなかったですね。学費値上げによって、なんとか窮状を打開しながらやっていましたが、学費値上げもそうたびたびやるわけにいかないし、代りに学生数を多くすると、施設も教員も足りなくなるという具合で、本当にしんどい状態であったわけですよ。

わたしが総務部長になったとき、明徳館の何期目かの工事が終わったところでしたが、ご存知のように大教室を作って、いわゆるマスプロ教育をやるほかなかった。それで、マスプロ反対の運動が起こってきた。わたしたちは大学の財政状況の実態を訴えて、今はある程度やむをえないことだが、小さい教室も作って小人数教育もできるようにと、小教室や中教室も併せて作ったわけですよ。

――寧静館なんかそうですね。

大江 それから新町校舎なども……。あれは日本電池株式会社からその頃に買入れて、教室その他、学生の福利施設をふやしたのです。

――新町校地の購入は、なかなか時宜にかなったよいお仕事ですね。

大江 今出川キャンパスだけでは、もうどうにもならんようになっていたので、服部史郎君と一緒にいろいろやったのです。土地とか施設の購入など、服部さんはなかなか上手で有能な人でした。新町校地についていえば、いまプールになっている新町通り今出川下るの土地建物も、まとめて一緒に買入れるとかねえ。あれは島津製作所のクラブ・ハウスだったと思います。とにかく、そういう面で、服部君は、同志社に随分貢献されたと、わたしは思っています。

――マスプロ教育の弊害を、なんとか打解したいという気運が起ってきたわけですね。

大江 日本の戦後社会も大分落ち着いてきて、真面目に勉強する学生も徐々にふえてきました。それで、「千人も詰め込んでやるような教室の授業で、本当の教育ができるか」と言われると、辛いわけですよ。「これでよいとは誰も思うていません」といって、いろいろ工夫したわけです。多少無理もして。

当時の学長は大下角一先生でしたが、大下さんは戦前から牧師をしてこられた方で、大学社会の外で豊富な経験を積んでおられ、また牧界などの見識もあり、そういう経験や学識を生かされて、大局的に物事を見て対処される方で、なかなかすぐれた学長さんだったですよ。あの頃は、いまのように学内が整理されてはいなかったから、ご苦労が多かったわけです。本当によくがんばられたと思います。

――学費の値上げはせんならんし。

大江　そうそう、当時は国庫補助もなかったから。それに、なんといっても、みなまだ貧しかったから、学費値上げ反対が、学生運動の中心のようになってきておったわけです。

――大下先生は、早く亡くなられましたねえ。

大江　まだ若かったし、これからの人でした。私はほんとにお気の毒なことだったと、今でも思っています。

再び就職問題について

――就職部長になられたのは何年ですか。

大江　昭和三十六年に、総務部長から移ったのです。

――その頃ですと、就職事情もよくなっていたんでしょう。

大江　いや、まだまだ駄目でした。池田勇人内閣の時代で、所得倍増計画などが言われておったけれども、倍増にはほど遠い状態だったですよ。よくなってきたのは、田中角栄内閣になってからじゃないですか。個人的なことを言うてなんだけれども、わたしが昭和四十六年に退職したときの給料が、十四万八千円でした。十四万円代というと、今なら大学出の初任給ぐらい（笑）。当時としては、事務職員としては高額の方やったんだから、ベース・アップがぐっと大幅におこなわれるようになったのは、わたしが退職して以後、四十七、八年頃からのことなんでしょう。

――昭和三十年代の後半でも、同志社の卒業生の就職状況があまりよくなかったというのは、ちょっと意外ですね。

大江　学生数がふえておったことと、そこへもってきて、日本の経済状態が一時不況に落ち込んだ時期だったので、まだ十分ではなかったと言えましょう。ぼつぼつよい所へ就職する人がいるにはいたけれども、就職希望者が多くなっていたので、全体的にみると総じてあまりよくなかったと言えるでしょう。

そんなことで、わたしは企業についていろいろ研究してみたのです。それでわかったことは、大阪という街は住友系の会社を中心にして発達してきた街である、ということでした。住友金属、住友化学、住友銀行、住友生命、住友不動産……というふうに数えてゆくと、当時で十六社ほどあった、みな大会社ばかりです。その十六社のうち同志社へ求人があるのは半数ほど。「これじゃあかん、もっと住友の系へ就職できるようになんとかせにゃいかん」というわけで、星名秦先生が学長になられたときだったけれども、星名さんはラクビーで顔が広いし京大卒でもあるので、住友系の会社を一緒にまわってもろうたり、住友関係の会社の主だった人に集まっていただいて、就職懇談会を持ったりもしました。そんなふうにして、同志社に対する企業側の認識もだんだん高まってきて、同志社の卒業生も徐々に大企業の方に食い込めるようになったわけです。

――国立大学の方はよかったんですか。

大江　国立、特に京大は大したものでした。会社が大学を指定してくるわけですからね、指定制ですから、同志社は関西ではまだよい方だったけれども、大企業の場合には、なかなかその指定の枠の中へ入れてもらえないわけですよ。

――今でも指定制はあるわけでしょう。

大江　ありましょう。これはなかなか一挙には解決できない問題です。相手が決めることですから……。

私学はどこでも此のように同じような問題

をかかえておるのですから、「自分の大学も大事だけれども、私学全体がよくなるように協力させにゃいかん」というわけで、他の私立大学に呼びかけて、情報や意見の交換、更に、私立大学に対して門戸を開放するよう企業に働きかける、というようなこともやりました。

――関西と関東ではどうなんでしょうか。

大江　そりゃ残念ながら関西はまだ駄目です。経済も政治も文化も、依然として東京中心でしょう。一流企業の本社は、大部分が東京にある。東京で大学生活を送った連中は、地方都市の大学卒に比べると、何といっても自信をもっとるわけです。わたしもたまに東京へ行くと、なんだか外国の大都会へ来たようで圧迫されますよ、「ここ日本か」（笑）、そんな感じを受けますよ、実際問題として。

わたしは、同志社をはじめ関西の大学で学んだ人の能力が、東京の大学出より劣っているとは思いません。ただ、就職試験などの場に臨んで、関西地区の人は十分に実力を発揮することができん、そういう問題だと思うのです。大都会や、大企業のビルなどの雰囲気に呑まれるわけですよ。東京の大学出にはそれがない、自信をもっている。東京のような大都会に対するコンプレックスを、関西や地方都市の人は自然と自分の何処かに持っているわけですね。

――そのことが、東京へ進出できない原因なんでしょうか。

大江　それのみとは思いませんが就職先の選択に当って、最初から敬遠しようとするところがある。日本銀行とか日立製作所などから求人があっても、「そんな大きな所へ行っても」というような――。そういうところには、実力をもっている先輩もあまりいないということもあります。わたしは卒業生に対して、「入れる実力のある者は、入って行ったら、その後に続く後輩も入ってゆくんだから」と、やかましゅう言いましたが。東京の大学卒と五分に対抗する、そういう気概が大切だと思うのです。地方の企業とか中小企業などへ入って、実力相応の出世をねらうというのも、それはそれで一つの生き方やとは思いますが……。

本部と諸学校

――就職部長から、本部の庶務部長に移られたのは、何年ですか。

大江　昭和四十三年四月でした。生島吉造さんが香里中高の校長になって移られたので、その後任にということで。

移るに際して、わたしの希望は、「今後、本部と大学、女子大学などとの職員の人事交流を積極的にやって欲しい」ということだったんです、「それはええことや、大いにやりましょう」ということで庶務部長になった。ところが、なったらそれきりでした。（笑）

――以前から、交流はぼつぼつはおこなわれていましたがねえ。

大江　多少おこなわれていましたけれども、もっと積極的に交流した方がよいと思うのです。わたしなど大学の総務部長をやっていたから、本部のことはわかっているつもりでいたけれども、実際にそこへ行ってみると、はたから見て思うていたのとは違う面がいろいろありました。実際にその立場になってやってみないことには、本当のところは容易にわからんわけですよ。

――諸学校の独立採算制も、人事交流などをむずかしくしている要因でしょうね。

大江　いくらかそういう面はあるでしょう

な——。あれは田畑忍学長時代に厳しく言われたので。それぞれの学校が、それぞれの収入で賄う努力をせにゃいかんということを強く言われて出来た制度でした。実際には、それ以前からそういう精神で各学校はやっておりました。ただ、形式的に本部が予算を統括して管理しておっただけのことでしょう。だから、本部が勝手に、予算を他の諸学校へ流用するようなことはなかったでしょう、どの学校とも独自に学費値上げなどして、苦心して収入の途をはかっておったのですから、勝手に流用などできませんからね。

いずれにせよ、独算制以前から、人事交流はむずかしかったようです。

——独算制については、どうお考えですか。

秦孝治郎氏

大江　いま言ったように、本部は形式的に管理をしておっただけのことだった。けれどもそういう管理方式も、法人全体の立場に立って考えてみると、やっぱりも一度じっくりと見直す必要がある様に思いますね。「自分の学校の収入なんだから、それをどう使おうと勝手やないか」というような考え方が強くなると、法人全体を一本にまとめる力が必要な場合に遭遇すると、やはり具合がわるいと私は考えます。

教職員組合との交渉形態について

——庶務部長時代のお仕事で、つよく印象に残っているのは、どんなことですか。

大江　本部へ移ったらすぐに、組合連合との待遇改善の交渉をやらされた。当時の交渉というのは大衆団交といった形で、沢山の組合員の方と、深夜にいたるまで話あうやり方で、そりゃお互にえらく疲れました。

わたしが移った頃、長年やってこられた秦孝治郎理事長が高齢で、いつまでも交渉をやっていただくのは気の毒だという話がでておった。また、学外の理事についても、山口泰弘さんとか川北貞一さんなどが交渉に当って下さっていたけれども、組合との交渉の内容は学内問題が多いので、こまかいことになるとわからないことがある、そこを組合から突かれる。そういう問題がありました。

それで理事会では、本部事務局のスタッフと学内理事による交渉委員会をつくって、その委員会に交渉に応じてもらうことにしたらどうかということで、わたしに委員長になってやってくれということになったわけです。理由を聞いてみるといちいちもっともなんで、止むなくわたしが職務上、交渉委員長というものになって交渉をやりました。ところが、大衆団交という形でやられたのでは、こまかい話ができんわけですよ。時間も無制限のようなものでした。当時の連合の委員長は、商学部の島弘さんでしたが、二十六時間にわたって交渉したこともありました。それとは別のときでしたが、学内理事の中には、「こんな交渉にはつき合っておれん」と言って、怒ってしまうといったこともあったりして、そりゃもう大変なことでした。

そういう経験を経まして、これはもう少し筋道をたてて話合いができるようにしなければいかんと考え直しまして、交渉の形式を改

める提案を組合にしたわけですよ。

――人数の制限ですか。

大江　人数もさりながら、時間も、ずるずる深夜までやっても、二十六時間やっても、実質的な実りのある話合いはちっとも進まないので……。

――組合は受け入れたんでしょうか。

大江　いやいや、それがまた難しくって、島さんの時代には解決できなくて、次の年もその次の年も妥結には至らなかった。そうこうしておったら学園紛争の時代になって、学内は大変な状況になってきた。その年の委員長が文学部の里井陸郎先生で、継続していろいろ話合った結果、「組合側の人数は二十名程度、時間は二時間。その条件が守られるなら何度でも交渉には応じるが、それを守ってくれないなら交渉に応じるわけにはいかん」といって突っ放した。関東の諸大学でも、今までの同志社のような大衆団交の形をとっているところは少なかったようでした。

想像にすぎないけれども、組合の内部にも、交渉の持ち方については若干の異った意見もあったんじゃないかと思う、交渉中にひどい野次などもあったし。それに、給与ベースも大分よくなってきてもいた。そういう種々様々な諸条件もあってか、里井委員長の時に学校当局の気持を理解してくれて、「誠心誠意やってくれるか」といわれるから、「じっくり話合って、やれるかぎりのことはする、ルールさえ守ってくれるなら、何度でも話合いに応じる」と言って、やっと二時間二十名を目途とした交渉がもたれはじめたわけです。学園紛争で、先生方も学生自治会などとの団交で苦労しておられたときでもあったし、双方共に理解が進み、歩み寄ることが出来たのではないかと私は思っています。

わたしは、その年の暮れに定年で退職しましたが、その交渉方式が次第に定着して現在に至っているようです。

――里井先生も亡くなられましたねえ。

大江　そうですねえ、先生には迷惑をかけました。まだまだ若かったのに――。

秦孝治郎さんのこと

――秦理事長について何か。

大江　秦さんは組合との交渉に限らず、なかなか手腕もあって大した方でした。名理事長だったといっていいと思っています。秦さんはもともと実業家で、その経験が豊富なところへもってきて、理事長としての職務に専従されたから、学内の事情にも通じておられた。経営の中心になられる方は、やっぱり専従でないと具合がわるいと思いますよ、こんな大きい私学ではね……。学内の事情に通じて、いろんなことを大所高所からみる、そうでないと経営の中心になって責任を果たしていくことは難しい。

秦さんは立派にそれをやられた。団交でも名人芸を発揮されて、組合からも人気があった。大衆的人気がある方でした。ああいう人は珍しいですよ。われわれは組合から好かれるようなことは、なかなかできないのでね。(笑)

――団交が好きなんやないか(笑)、そう言われたりしていましたわなア。

大江　そこが秦さんの人柄でもあり、長年の豊富な経験を上手に生かされたわけです。幅の広い知識もある方でした。いろいろご苦労が多かったと思うけれども……。

校友会について

――先生は退職されてから、校友会のお仕

事を何年かやられましたね。

大江　山口泰弘さんが校友会長をしておられて、校友会の財政が赤字になっていて、「大変やから手伝って欲しい」といわれて、一年半ほどやりました。増収をはかるためにキャンペーンをやるとか、財政の立て直しを考えていろいろやった。そしたら今度は、「専務理事をやれ」というわけですよ(笑)。それで専務理事を三年間勤めました。校友会費も多少値上げをし、会費納入者を増すように努力もしまして、財政はいくらか黒字になってきた。その間に『校友会名簿』をつくるとか、北垣宗治先生が訳されたディヴィス著の『新島襄の生涯』を校友会で出版したりしました。

――校友会の運営も、大きな世帯ですから大変なんでしょう。

大江　同志社のように、校友会が母校から全く独立して、校友会費だけで運営している例は、全国でも少ないようです。それはそれなりによい点もあるわけだけれど、運営はしんどいですよ。

それにしても、同志社の校友会はよくやっている方で、機関紙の「同志社タイムズ」を毎月発行して会員に送っているだけでも、なかなか大変なことです。他の学校の校友会の機関誌は、郵税の値上げで廃刊になった例が多い。発行部数や回数をうんと減少させなどして、なんとかやっているところもあります。

名簿にしても、卒業生が二十万人以上もあるような大学では、名簿を作りたくても作れないというのが実状のようです。同志社は今のところ何とかやっていますが、実際にそれがまた大変な仕事です。

校友会の仕事にたずさわっている人たちは、本当に安い給料で、奉仕の精神でやってくれているので、そういうことも多くの人に理解していただきたいと思いますね。

――先生の浮世絵のコレクションは大したものだとうかがっておりますので、そういうお話もおきかせいただきたかったのですが、時間の都合でまたの機会におうかがいしたいと思います。

今日は、長時間ありがとうございました。

(一九八二年五月十二日収録、於同志社有終館担当理事室)

『新島襄全集』内容（予定）

第一巻　教育編
第二巻　宗教編
第三巻　和文書簡編（上）
第四巻　和文書簡編（下）
第五巻　日記・紀行編
第六巻　英文書簡編
第七巻　英文日記編
第八巻　雑纂編
第九巻　来簡編
第十巻　A・S・ハーディ編著『新島襄―生涯と手紙―』（訳）

『新島襄全集』編集委員会編
株式会社同明舎出版発行
一九八二年十二月　第一巻発行予定
以後隔月発行の予定（定価未定）